

（４）薬物依存者やその家族に対する立ち直り支援活動

日 本 ダ ル ク

ダルクは民間の薬物依存症リハビリ施設です。薬物依存症者に共同生活の場を提供し、薬物を使わない生き方のプログラムを実践することによって、薬物依存からの回復を支援しています。ダルクのスタッフは、プログラムによって回復した薬物依存症者本人で構成されています。自分が薬物を使いながらでは仲間の回復の手助けができないので、自然に薬物が止まっています。当事者が当事者を助ける活動は他のものと比べることができない価値があります。

プログラム期間は各個人によって異なりますが、基本プログラム期間を経て、その後、就労や自立を目指しています。また、退寮後も、アフターケアとして、施設に定期的に通うことを勧めています。

ダルクでは、よりよい支援ができるよう保健所、精神保健センター、保護観察所、保護司等との連携を強化したり、必要に応じて病院等と治療方針を検討したりするなど、薬物依存症治療のネットワークを作ることで、適切なサポート体制を作っています。

また、施設内での活動だけでなく、刑事施設や少年院と連携をして、薬物からの離脱プログラムに協力している施設もあります。

現在、35都道府県に46ヵ所58施設がありますが、緩やかな「連携」の下、それぞれの施設が地域の状況に合わせて柔軟な活動をしています。

未成年者を中心とした薬物乱用が広がり、第3次覚醒剤乱用期として社会問題化された1990年代半ば頃から、学校等の教育現場から当事者の体験の重要性が着目されるようになり、地域の社会資源としてダルクが注目されるようになりました。現在の子ども・若者に向けての教育活動を挙げると以下のようなものがあります。

ア 学校（小学校、中学校、高等学校、大学、専門学校等）の予防教育支援

学校等から薬物乱用防止に関する講演依頼があった場合、薬物の恐ろしさを強調したり、脅かししたりするのではなく、薬物を使用してきた当事者が、どうやって薬物と関わったか、そしてどうして薬物を止めたいと思うようになったかだけを話すようにしています。私達当事者は教える事はできないし、しないのです。

薬物乱用者の低年齢化にともない小学校での講演も増えてきています。小学生を対象とした講演では、難しい言葉を使うことができないことや、飽きやすいということもあり、講演とともに、一人の少年が薬物を始めてからダルクにつながるまでを、当事者が劇にして演じる場合もあります。子どもたちは、真剣に話を聴き、自分にも起こりうることとして受け止めてくれているように思います。

また、講師を担当したスタッフからは、自分が過去に薬物を使用していた意志の弱いダメな人間ではなく、人の役に立てることもあると感じたとの感想もあり、若い当事者にとっても意味深い活動になっています。

小学校における講演の風景



イ 教員への講演活動

教員に対する講演活動もしています。自らの体験を聴いてもらうことによって、アルコールを含む薬物依存症が病気であることについて理解を深めてもらっています。また、当事者を排除することではなく、依存症の治療と再発防止のための支援をすることが、最大の予防策であることを説明しています。

予防教育支援活動については、学校等との連携をしながら、このような取組を積極的に続けていきたいと考えています。

薬物依存の青少年の回復支援のためには、従来あるダルクよりも教育的なプログラムがある施設が必要不可欠であると考えています。

また、早期に治療につなげるための制度がぜひ必要です。すでに、グアムでは青少年が薬物の問題で州立病院の窓口で相談に行くときには保険証を必要としない制度があります。日本においても、学校や家族に知られることなく相談できるようなシステムを持ったセンターが必要だと感じています。

(5) 性同一性障害者や性的指向を理由として困難な状況に置かれている若者をつなぐ活動

NPO 法人ピアフレンズ

NPO 法人ピアフレンズは、孤立しがちな10代、20代の性同一性障害者や性的指向を理由として困難な状況に置かれている若者（セクシュアルマイノリティ）をつなぐ活動を平成14年より行っており、平成21年にNPO 法人化して活動を行っています。

ピアフレンズの主な活動内容としては、隔月に開催している若年層の男性同性愛者（ゲイユース）向けイベント「ピアフレンズ」があります。このイベントの特徴は、自分以外の仲間に出会い、支え合う環境づくりを、スタッフ全員が同じ当事者という環境の下で、「ピア＝仲間」として行うということです。このことは、参加者のプライバシーを守る安全な環境をつくと同時に、当事者同士で日頃の悩みを語り合うことで、お互いに抱える問題の解決へとつなげていくことができるという二つの面で有効であると考えています。

開催回数は既に58回（平成22年11月現在）を数え、延べ3,000人以上の参加者を集めています。活動拠点は、主に東京を中心とした首都圏ですが、大都市以外の、特に孤立の状況が厳しい地域でも開催実績があり、地方の状況にも適応した活動を展開しつつあると言えます。

平成22年10月に行われた第58回ピアフレンズの様子
(大阪府立男女共同参画・青少年センター)



当事者の実態としては、昨今、人口の3～5%程度が同性に性的指向が向くと指摘されていることや、性的違和や性自認などの問題が広く報道されていることが挙げられます。そして、同じく広く報道され、また深刻な問題となっているのが自殺の問題です。

「男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究」（平成17年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業）では、ゲイ・バイセ